10月分市況報告書　　報告者　中島良晴

調査日　群馬県森林組合連合会共販所　10月2日

10月に入っていよいよ秋の到来の筈だが、今日も暑い。前橋では31℃を超えたと言う。
観測史上10月の気温としては最高気温を更新したそうだ。
とは言え”観測史上最高”とか”かつて経験した事の無い”とか言う言葉も日常の言葉になり
特別ではなくなった。 言葉の内容はかなりの異常さを意味する物だが、さして危機感を感じ
なくなっている事が一番の危機だろう。
市の方もこの暑さで、全く”秋”と言う感じが無い。 市に掛かっているのは計画通り生産されている
国有林材と、前回以前からの売れ残り･支障木などの小規模伐採などが並んでいるに過ぎない。
”秋の需要期”などと言っても丸太価格は上がらず、全く動き出す気配が見えない。
金融緩和続行で住宅ローンは上昇している上に、住宅の設備機器は他社との差別化競争で
ドンドン進化し、価格も上がり続けている。 その分のしわ寄せは一番肝心な木材に来る。
豪華なキッチンを納めるために、ブレハブを作っている様な物である。 事実”様な物”ではなくその通り
の家屋もある。住宅メーカーが売り込むのは設備の豪華さとデザインで、その分材料でコストダウンを図る。
これは　空き缶のピンホールカメラに高価なレンズを取り付けるような物で、本末転倒と思ってしまうが、今の
需要傾向を見極め、これに添う様な、方向を見定める事が肝要なのだろう。
今日買い方の話で出た話が「今までは丸太の仕入れ値に○○割り乗せて、運賃･電気代･人件費
機械損料などを捻出していたが、丸太の値が安すぎて、これに何割り乗せても赤字になる。 今は
丸太の値プラス運賃･人件費などの諸経費を足した値段でなければ、足りない。諸経費分は、
丸太の価格を上回る。」 との事だった。
世の中では「何十年も値上げをせずに頑張ってきたが諸物価高騰の為に値上げに踏み切る」と言う
話をよく聞くが、木材業界では「どうすればこれ以上値段を下げずに維持できるか。」でもがいている。
「次回の市になれば、新材も入り始めるだろうが、この値では森林組合もそう積極的に出してはくれない
のではないか？」という見方が強い。 それでは素材生産が本業の業者はどうか？　と言えば
国有林の請負で仕事は足りている。
どうやら秋の需要期も、さほど弾みが付くと言う訳には行かない様だ。
とは言え、今回の入札結果を見てみると、価格は安いが良く売れているように見える。
更に、落札物件の欄外にある数字は応札枚数で、これがほとんど2～4枚入っている。
安い単価の低次元で、競争が起こっている事を示している。 この枚数だけ欲しかった買い方が
居たという事だが、落札価格を見れば下がり気味なので、今後価格が伸びることは期待できない。
”相場は2番札に有り”という言葉はそういう意味である。
そんな中で、前出の**需要動向に添った方向**として、２×４材料用の造材を伸ばしてはどうだろう。
今　造材は3.0mが主流で太すぎる物まで3.0mに伐っている。その他は2.0mのバイオ燃料用になってしまう。
3.0mの柱材適材でも　10,000円/㎥　程度,バイオ燃料なら5,000円/㎥ 程度となってしまうが、そもそも元玉
の良質な部分をチップ燃料では余りにもったいない。 2.0mであればあと50cm長く伐るだけで、着値では
あるが、　10,000円/㎥で受け入れるとの事。 元玉の太い所を2.5m造材で何本か落とせばその上の
3.0m材も柱の適寸だけになる。造材が短い事で少しばかりの曲がりは問題なくなる。
3.0mの価格によっては、全て2.5mでも良い場合もあるかもしれない。30cmφ以下～16cmφは着値で
12,000円/㎥だそうだ。一考に値するのでは？　一応渡りは付けてきた。

調査日　素材生産協同組合　10月18日

今日の素生協の市は、”もみじ祭り”と称して行われた。 いつまでも続いた残暑がようやく納まりを見せ秋の需要期が始まる季節である。 県森連も16日の市は、”県産材需要拡大特別市”と位置づけて開催された。 どちらも秋の需要を期待して、かつては「ここで弾みを付けよう！」という意図で賑々しく開催されたものだった。 しかし昨今のこの時期はどちらの市も木材生産は止まったままで新しい材と言えば、国有林材である。 こちらは夏から継続して生産されている物で、まだ虫害が進みつつある**秋材とは言えない物である。**

国有林も、この時期の材を早期に売り払おうとする意図なのか、スギに関しては徹底的に3.0m造材を行い、太さも3.0mとして利用価値が高い部分に徹している。

つまり 20cm～26cmに揃えている。 その他かつて柱の適寸とされていた16cm～18cmは3.5寸角用として使われるので、製品価格から計算すると一格落ちになる。

このように生産された丸太は、やはり柱専門の買い方がすべて落札している。

但しその上の28cm～46cmの物件が2椪出ていたが、柱業者の製材機には入らないため土木用材の業者が安く落札している。　もう一件3.0mの14cm一目の椪があったが、これは16cm～18cmの仕分けをする中で16cmを満たさずにこぼれて出来た椪だが、200本もあった。これには応札が無かった様だ。

ヒノキに関しては、3.0mが多いが、この柱を立てる土台用として4.0mも良く売れている。

今回の市ではヒノキ40mの土台用丸太が高く売れている。 ヒノキの土台用丸太は元々品薄傾向ではあるが、この値は買い方の使い方によるものだろう。 例えば自社で製品化した材を、自社で請け負った建築に使えば高値で落札できる。 ヒノキの2.0mも売れている。 これは恐らく板材用であろう。

ヒノキは床材にも使えるし、手入れをされた良い木ならば腰板などの化粧用にも使われる。

(先日川場庁舎で見たスギの圧縮材なら床材になるが、加工のコストが高く結果的にスギの床材は高価)

圧倒的に生産量が多いスギと比べると、少数派のヒノキの方が利用範囲は広い。

カラマツは相変わらず合板用の様だが、遠方の林ベニアの名前が見えなくなった。

やはりトラックの長距離輸送に制限が設けられたせいだろう。売れてはいるが競争が減った分安くなった。

広葉樹に関しては、こちらの市は広葉樹業者にとって”掘り出し物”に出会えるかもしれない魅力のある市場であったが、今回はたった8椪しか出ていない。 その内4椪が6,000円/㎥均一で売れたのみだった。

一般材の方では40cm～62cmの太い物が並んでいたが、4.0mの他3.0mや2.8mなど欠陥部分を避けて伐ったと思われる物で単木の支障木伐採の様な物、その他の物件も乱尺なのを見ると伐採のプロフェショナルの仕事では無い様だ。

いずれにしても、あれ程整理しきれなかった材が積んであった事務所の前の土場は、全て空の状態で開いている土場は綺麗に掃除が行き届いている。 開設以来バークで覆われて守られていた区画線が擦り切れる事無く綺麗に現れていて、それが一層スッキリした感じを際立たせている。

今まででこの様な景色の素生協の土場を見たことが無かった。

米も新米の季節だが、丸太も秋の新材の季節を迎える。間もなく新鮮な秋の新材が搬入され、市場にも活気が戻って来ることだろう。　木材市況全体を見渡しても具体的に活気が戻って来る根拠は無いのだが、夏を超えた材が一掃され、新しい材が並ぶ時何か良い事が始まりそうな気がするものだ。